

九州にあるファミリーハウス（病院が運営するハウスは除く）

	運営団体	場所など	1家族の利用料金	連絡先
福岡	福岡ファミリーハウス	福岡市東区、中央区、南区、城南区に計5カ所（9部屋）	1泊800円	畑中さん090(7988)8189
長崎	ペンギンの会	長崎市中心部（2部屋）	1泊500円	野添さん095(837)8362
熊本	たんぼぼハウス運営委員会	熊本市内に3カ所（5部屋） *熊本病院と熊本市市民病院にかかっている子どもと家族が対象	1泊1000円 *うち1カ所は別にリネンのクリーニング代500円	田上さん096(339)6379
大分	NPO法人ファミリーハウス由布 B.A BY MINE	由布市の大分大狭間キャンパス内（暫定の1部屋）	1泊1000円	大分大小児科職員090(4356)6102
宮崎	宮崎ファミリーハウス	宮崎市淀川（2部屋）	1泊800円 *別にクリーニング協力金としてリネン1組200円	牟田さん090(3011)6211
鹿児島	NPO法人こども医療ネットワーク、がんの子供を守る会鹿児島支部	鹿児島市内に2カ所（4部屋）	1泊1000円	利用は鹿児島大小児科099(275)5354 運営などは中間さん090(1921)3511

*入院・通院する子どもとその家族が対象だが、団体によっては、部屋に空きがあれば成人も受け付けている

自宅を離れて病院で闘病する子どもとその家族のための滞在施設がある。「ファミリーハウス」などと呼ばれ、九州では1995年に熊本と福岡に生まれた。運営にかかわるのは、わが子を看病した経験のある親、子育ての先輩である主婦、そして家族とともに病気を闘う医療者たち。15年たつて、ハウスの輪は広がっている。（南陽子）

日向灘に注ぐ川沿いの住宅街。宮崎市にあるマンションの1室が、昨年10月に宮崎に初めてできたファミリーハウスだ。南向きの6畳間が二つ。持ち主が無償提供にもかかわらず改装してくれたため、室内は明るい。台所には炊事道具、洗濯機もある。

「ドアを開けたとき、自宅に戻ってきたかのようにひと息ついてもらえれば」そう話すのは運営に当たる吉野智子さん(42)。白血病だった次女を2歳7カ月で亡くし、6日で丸5年となった。福岡市の九州がんセンターで骨髄移植を受けた後の合併症

する家族が胸の内を分かち合える家に」。メンバーの牟田寿恵さん(44)の願いだ。ファミリーハウスは企業が社会貢献で建てたり、病院が備えたりする例もあり、福岡市立こども病院▽久留米大病院▽聖マリア病院▽熊本赤十字

の家を買った金を役立てればいい。2人に子どもはなく、夫婦の故郷・福岡でその志を実現させた。運営に協力したのは、当時、福岡県赤十字血液センターに勤めていた徳永和夫さん(62)。徳永さんたちボランティア

は「福岡ファミリーハウス」として今に至る。千葉県の郵便局に勤めていた夫の寅市さんは、91年に外耳がが分り東京都内に入院。自宅から病室へ通うのに苦勞していたサナエさんは、新聞で病児の親のための宿泊施設を知る。「自分が死んだ

しているが、負担は大きい。「ファミリーハウスは高度医療機関には当たり前にあって、市民が運営にかかわるのが理想と考えるのですが」。メンバーの高原登代子さん(48)は語る。

「ファミリーハウス」広がる輪

病気の子と家族の宿泊施設 心身に休息、泣いてもいい

宮崎県でも高度医療を提供する病院は限られ、二重生活の家族は多い。院内のソファや車中で夜を明かす姿も珍しくない。ハウスの立ち上げは、小児科医が物件を紹介してくれたことから。寄付金で家電をそろえ、清掃や管理は吉野さんたち女性7人のボランティアが担う。「ゆくゆくは、利用

吉野さん自身、5カ月間の付き添い中、がんセンターのそばにあるハウス「あいのいえ」に助けられた。病室では、次女の小さなベッドに体を折り曲げて一緒に眠る。母が交代に来てくれたときは、何かあればすぐ駆け付けられる距離のあいのいえで手足を伸ばして休憩できた。利用料は1家族1泊800円。夫と長男、長女が見舞いに来たときもそろう泊まった。



3階建てマンションの10号室が、宮崎に初めてできたファミリーハウス。左から牟田さんと吉野さん

ボランティアや資金不足も

市民による活動ゆえに課題もある。福岡ファミリーハウスが運営するハウスは現在五つ。善意とはいえ家賃や固定資産税は払う必要があったり、持ち主の事情が変わって貸してもらえなくなったり

と、維持が難しい。月足さんも死後の相続を考えて70歳を機に売却したため、現在のあいのいえの持ち主は代わっている。800円の利用料ではシーツのクリーニング代だけで赤字。寄付金が頼りだ。掃除の人手も足りない。昨年4月には、九州大病院で売店などを運営する財団法人が、病院のそばに「森の家」というハウスを建設した。九州がんセンターも研修施設を提供。福岡ファミリーハウスがいずれも室内の掃除に協力

福岡ファミリーハウスは、気兼ねなく過ごしてもらえよう、掃除などでも利用者と顔を合わせないよう配慮する一方、各ハウスにノートを置いていく。つづられる感謝がスタッフの励みだ。

9歳の息子を亡くした母親は「ハウスを利用できたので、心を残すことなく精いっぱい看病ができた」と書き残した。次に利用した女性は「遠い空の下からお祈りしています」とつづった。ボランティアと利用者、利用者と利用者がさりげなく気持ちを交わす。そんな交流が「病院近くのわが家」を支えている。

あいのいえを利用する長崎県松浦市の森川裕子さん(39)も「何度一人で泣いたか知りません。ボランティアに出て、助けてくださいと夜空にお願いしていました」と振り返る。長男圭利さん(17)が、がんセンターで骨髄移植を受けた3年前のことだ。本人の前では泣けない。泣くことができるのがハウスだった。圭利さんは主治医も驚くほど良くなった。今は数カ月ごとの受診の前夜に親子で利用している。

いのち元氣